

甘く優しい
短篇小説

片岡義男

甘く優しい
短篇小説

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社

あま やさ
甘く優しい短篇小説

印刷——一九九〇年六月二〇日

発行——一九九〇年六月二五日

著者——片岡義男
かたがわよしお

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

182 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一
編集部(03)二六六—五四一

振替——東京四—八〇八

印刷所——株式会社光邦

製本所——株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります

© Yoshio Kataoka 1990, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-349007-1 C0093

目次

趣味の腕立て伏せ 5

そして最後にマヨネーズ 37

ソノマの重い赤 75

甘く優しい短篇小説 107

三日月と会話する 143

いちばんつらい人 173

装帧
平野甲賀

甘く優しい短篇小説

趣味の腕立て伏せ

「田中です。久しぶり」

電話のむこうに田中優二の声を聞いたとき、赤木舞子は反射的に、

「うわあ」

と、言ってしまった。

いくら反射的とはいえ、もうすこしましな台詞せりふが出てきてもいいはずだ、と思わなくはない。しかし、三十三歳になったばかりの舞子は、自分がどんな女性なのか、よくわかっていた。

つきつめるなら自分は徹底して陽性なのだと、舞子は結論していた。彼の声を電話をとおして二年ぶりに聞いて、うわあ、と驚き喜んでしまう自分を、舞子は肯定的にあきらめていた。

「久しぶり」

田中がくりかえした。

「どなたかしら。聞いたことのある声よ。私の知ってる人だわ。誰だったかしら」

静かなオフィスの、個室と言つていい一角に、彼女のデスクがあった。そのデスクでひとり華やかな笑顔になり、その笑顔にふさわしい声で、舞子は送話口にそう言った。

田中は、笑つていた。

「元気そうだね」

「おかげさまで。そちらは」

「変わらないよ。いまはこうして、突然、きみに電話をしている」

「突然の電話に予告があつたら、面白くもなんともないでしょう」

「ということは――」

と、田中の口癖が出た。長いあいだ忘れていたその口癖を耳にして、舞子は懐かしい気持ちにかられた。懐かしい気持ちになれる自分を、彼女はうれしく思った。三年近く一軒の家でいっしょに住み、二年以上まえに別れた田中優二という男性に対して、いまも自分が解放された好意のような気持ちを持っているのをこうして確認するのは、うれしいことだった。

「ということは、この電話は、すくなくとも面白くはあるのだね」

彼が、そう言った。

「面白いです」

「夕食に誘う電話なんだよ」

「いつ、誰を？」

「今日。これから。きみを。今日の夕食」

「ふむ」

と、舞子は言ってみた。

しばらく、間があつた。そして、田中が説明をはじめた。

「僕のほかに、男がさらにふたりいて、つごう三人なのだ。夕食にしよう、ということになった。せつかくだから、ひとりずつ女性を誘うといい、というアイディアが出て、いま三人がそれぞれに、心あたりの女性に電話をかけているところだ」

「そしてあなたは、私に電話をしてくださったの？」

「そうだよ」

「なぜ、私なの？」

「きみしかない」

「合計六人になるのね」

「二、三が六」

電話のむこうで田中は吞氣^{のんき}そうに言った。

「みんな面白い男たちだよ」

「いきます」

「うれしい」

店は予約が取れている、と田中は言った。その店で待ち合わせることにし、店の場所を田中は説明した。彼の説明するとおりに、舞子はレターヘッドに略図を描いた。

田中との電話を終わってしばらくしてから、舞子は外線電話をかけた。今日の夕食を、舞子はひとりで食べるつもりでいた。ひとりで夕食を食べることの出来る、心休まる店を、舞子は何軒か知っていた。そのうちの一軒に、今夜の予約がしてあった。その予約を、舞子は明日にのぼした。明日はかならずその店へひとりでいき、アメリカの同性の友人に手紙を書きながら、ひとりで心ゆくまで夕食を楽しもうと、舞子は思いなおした。

オフィスを、舞子はいつもの時間に出た。地下の駐車場へ専用のエレヴェーターで降りていき、コンクリートで作った空間のなかを、シトロエンCX25GTIへ歩いた。ボディの色を、人はワイン・レッドと呼んでいた。口にふくんだ瞬間、存分に重い奥行きと複雑な厚みを感じるような、そんな赤ワインの色だ。

地下からコンクリートのスロープを駆け上がって出てきた五月の夕方の街は、雨上がりだった。空気のなかに雨の香りが残っていた。気温がやや高く、風が出ていた。

田中と約束した時間にすこしだけ遅れて、舞子は落ち合う店の近くまで到着した。駐車が許されている場所にシトロエンを停め、そこから店まで舞子は歩いた。

自分が描いた略図のとおりに、わき道を右に左に曲がりながら奥へ入っていくと、目ざす建物はすぐにみつかった。三階まで、舞子は階段を上がった。

店に入った彼女は、いちばん手前の窓辺のテーブルに、田中とその連れを見た。田中のほかに男性と女性がひとりずついた。舞子を迎えて、田中が椅子を立った。

そしてほかの二人に、舞子を紹介した。男性は原田、そして女性は、杉浦加代子といった。

「あとふたり、つまり、あとひと組、やがて登場する。いま、迎えにいつてる」

舞子のために田中が説明した。その田中を、舞子はつくづくと見た。田中も、舞子を珍しそうに見ていた。

「すこしも変わっていないね」

と、田中は感心していた。

「まるで昨日ですもの」

「安心した」

「不安があつたのかしら」

「なくはない」

「私もよ」

「なぜ」

「印象が大きく変化している、というようなことがないように、と思っていました」

「昔のままの僕でいいのか」

「そうです」

「きみは、ひとまわりもふたまわりも、きれいになった」

田中と舞子のやりとりを、原田が笑顔で聞いていた。杉浦加代子は、もの静かに微笑していた。

「今夜は男三人だけで、渋くきめよう、という意見もあったのです」

原田が舞子に説明した。

「しかし、せっかくだから、女性をひとりずつ誘い出し、六人で夕食のテーブルを囲もうではないか、ということになったのです。六人で囲める丸いテーブルのあるこの店にまず予約を取り、それぞれ女性の選定にとりかかったのです。いちばん最初に僕が杉浦さんを誘うことに成功しました。笑い声の素晴らしい人、という基準で僕は杉浦さんを選んだのです」

杉浦加代子は、日本ふうの美人だった。書道の先生、というような印象を、舞子は持った。そしてその印象とは大きく方向の異なる、さらっとした感触の、軽い弾みをたたえた、耳に心地良い笑い声を持っていた。原田という男性が、笑い声だけを基準に彼女を夕食の相手に選んだのは、たいへんな正解だと、舞子は思った。

「そして僕は、きみを選んだ」

と、田中優二は、舞子を示した。

「いまみなさんからお話をうかがっていたところです。赤木さんは、横顔で選ばれたのですって」

加代子が舞子にそう言った。

「私が？」

自分の胸を指さして、舞子は田中にきいた。

「私が横顔で選ばれたの？」

「そうです」

「私は、横顔で選んでもらえるような人かしら」

笑って答えない田中に代わって、

「なかなかのものです」

と、原田が言った。

「みんなで、鑑賞しましょう。笑い声と、横顔。笑ってください、そして、横顔をもっと見せてください」

舞子は、原田と加代子に、横顔を見せた。

「さらにもうひとり、女性が来るのですって。その人がなにを基準に選ばれたのかは、ま

だわからないのです」

加代子が、さらに説明をした。

「野村という男が、いま迎えにいつている。もうまもなく、来るよ。野村には一度だけ、会っているはずだ」

と、田中は舞子に言った。

「小説を書く人だったかしら」

「そう。野村五郎。笑い声と横顔に對抗出来る条件として、彼がなにを思いついたのか、じつに楽しみだ」

「なにかしら」

「喜び勇んで、野村は迎えにいったよ」

「彼はいつになく興奮してたね」

「まあ、待つていよう」

茎の部分が長く細くのびている小さなグラスで、彼らは食前の酒を飲んだ。莢さやごとゆでたエンドウ豆が、つまみに出た。豆の香りを逃がさずにゆでた手ぎわに、女性たちふたりは感心していた。

ほどなく、ひとりの女性をとまって、野村が到着した。ほどよくすんで落ち着いた金髪の、知的にひきしまった雰囲気の白人女性だった。舞子や加代子よりも、彼女のほう

が小柄だった。鼻の高すぎる、ごく普通の顔立ちだが、角度によっては美しい人にも見えた。野村が全員に紹介した。ミュリエル・ボワサルド、という名前だった。愛称はエルというのだと、野村が言った。きれいな日本語を話すミュリエルは、

「カエルのエルです」

と、はにかんだように微笑して言い、みんなを笑わせた。

くすんだ金髪の小柄なミュリエルは、ブルーの瞳ひとみをしていた。そのブルーの瞳について、野村は得意そうに次のように説明した。

「笑い声と横顔に対抗するには、この瞳しかない、と僕は思った。だからミュリエルに電話をかけてみた。いつもの彼女は京都なのだけれど、思いがけないときに東京に来ていることがある。今日の午後、東京へ来たばかりなのだって。見てのとおり、ブルーの瞳。どうだ」

原田がひとりで拍手をした。その拍手を、野村は余裕を持って制した。そして、次のようにつけ加えた。

「こういう性質のブルーであるかについては、本人から説明してもらったほうが、説得力があると思はう」

「ブルーの色調が、気持ちに合わせて変化するのです。私の場合は、その変化が特に目につきやすいのです。ごく淡いブルーから、とても濃くて黒に見えてしまいそうなダーク・